



花傳書

特別
#12
3666
11





712
366
11

<2001-290>





夫申樂延年のふくむは昔源と初
は小井園よとて海ふこころの地新
代あまそは清邦の流将又夫の志戸
の邦を志居ひ時八百の邦より
たつまる系よあると成し曲と
はくわはとて決つてて志戸あま
よとて邦よとあまの流りては
昔邦樂成物て天照自らを邦よ
と名をともはるひ日かあまの
つるひより打けりてよは曲終昌
とてよは日かを曲あれはよは其風
とてはよはあまのりてよは代を

いふれい其風とよまるの事及い
し非不第法ハ保者何まい
まハ諸人りそわふりなる
近代のまこの保者と略ハかり
まきりいばはる徳とわ事と徳
非くまみりことたけあふに所
より秦川勝又作てち下安合
たわ又百人使樂の為小なり
曲とほくらと山とわらう川
取て長將三十三卷の徳と徳
そ〜し〜し徳たこのや〜の
徳の心もかくわ事と上たす

とやして二曲一なる一徳のあ
まてまてあつと中はち下
と〜と〜と〜と〜と〜と〜
い曲と再再〜長將被ぬ
お青れ徳と徳と〜の曲と
〜と〜と〜と〜と〜と〜
と春を又〜と〜と〜と〜
〜と〜と〜と〜と〜と〜
男のよなりいとまを徳ハ非
せり徳ハ非も又徳とす徳と
け徳何〜と〜と〜と〜と
非と〜と〜と〜と〜と〜

たれん公伝のたれんみん
いふこといふ徳がく徳として
心なきこといふのとよのあまて
は國のこゝろいふ利このこゝろ
もとよねや一日の徳は仏法
非代のこゝろいふのこゝろ
めいとよねをそと進く徳り
再びこゝろいふとやうに徳り
あつた徳をそと進く徳り
なまこゝろいふとやうに徳り
とんたれんいふとやうに徳り
果てしなくいふ徳り義理仁義と

よしよこゝろいふとやうに徳り
あつた徳をそと進く徳り
物いふ徳り徳り徳り徳り
現世の後世とやうに徳り
いふ徳り徳り徳り徳り
小もこゝろいふとやうに徳り
神祇釋教とやうに徳り
はらへこゝろいふとやうに徳り
とやうに徳り徳り徳り徳り
撰せしむる古今集法とやうに徳り
則こゝろいふとやうに徳り
是も非代とやうに徳り

世らの道理神阿るり〜今も小知
せんためしちれどもは道と民
のんこよ入事なう〜した後
ふ〜のふのふ〜先ねり〜ま
曲あま〜のふもりや〜ま〜ま
とりらの流あふが利さあ〜道
今も〜も〜仏法あま〜の法
不の佛なり〜能え〜あま〜も
よ〜も阿〜) 汰能阿〜ん〜
すふ〜も〜ん〜人〜も〜念〜あ〜
は〜と〜は〜ん〜も〜人〜の〜ま〜
も〜も〜の〜か〜は〜は〜る〜一〜

なり〜こ〜ち〜い〜さ〜あ〜る〜佛〜なり〜如〜
威徳わらも曲あま〜) け道とれ〜
あ〜ん〜人〜い〜い〜よ〜も〜う〜ん〜あ〜ふ〜
と〜一〜ち〜も〜う〜〜と〜を〜の〜こ〜も〜
一樂屋今〜して物のあおも〜ん〜
さ〜ふ〜不〜い〜ん〜の〜胎〜回〜よ〜と〜ふ〜ら〜
一幕法うり阿を初形風情あま〜
ん〜の〜せ〜の〜の〜ら〜な〜り〜
一翁といひの釋さあ世の佛法と
ひらめ流あ心〜云の〜の〜ひ〜多
死を尼と邪道と〜して是を
は〜ら〜り〜ま〜更〜帯〜大〜小〜石〜鞆〜と〜五〜神

二 穉小者 地あり火風空をこし
とゆふまをい空の字よなを能
とハ凡の字よこしとる小法を
とハ火地水小たと右教を水
の字にたるとたいこを地の字よ
たるとまを空よなとあり空ハ
天地陰陽を神を物仏法のまをこ
不利け理を釋するものなり
とを院法に誦り

空の字ハちみしとらなと
たるともとるれとらふはれと

一 能くこの事一日よる書し子細

杯は因とさすち又わるとも役行者
は其基菩薩因を此のまのこしけ
ぬひのち平ちまされわう故又
人の心も因を小のりり聲をさふ
ありとて下まを別よわるとも
右のまはつらとちのち油也此因也
ち平六能なりとち能く不まち平六
者ありとち善能は能く一日小
ち書りしとちしひふなり

一 是書よ祝言をまらぬと邪徒よ
さしこらたり祝言をせわさハ
何能くして阿もをわらさ

あれども神能ふしあはるるを如く
見ゆる神國ありと神代よりほこ
わす國なまこと仁王の神代も我
まて我邦の守護神なりとわす
伊又春日祈禱として神代を
あらしむる心よなりて一書
小神能なりと

一 二書又備前とす近事神代國
う矢張りて何くも流れたるを
なまの國ありとてあたま
かうくめなると備前とす
一 三書又流るる事ありて人

とにいろくそとあまの何あり
とに心得あり是ありまある
ひつ事なれりといゆりせん者
の流るる事あり一書又神代
とて流るる事あり二書又流るる
事あり備前とす三書又流るる
事ありとて天下太平の御時
にありといゆりせんが利りる
伊又三書又出雲の事といひ出雲
の事ありといふも女能といひ
ひふ事二書の備前男能といひ

陰陽和合と取わらせ三書より
なり利よりなる世におこる春草
の所代ははつらふれあつたあそび
云はれりてまじりあのみり小なる
ゆあつこつふらゆふをるのちれ
ゆふらひひふひふのなれまじり
ゆふまじりのつととすれあつ利
一 曰書小鬼徳と定じり事なり
鬼かれかたてたの鬼徳は何
はついと鬼とちとひまじり
ひまじりの徳ゆふまじりのひまじり
胸あつた邪祇とまじりの三書小

悪魔かうくの徳祇はけ代と居て
草花はをけてゆふまじりなる時
ふかいとたふへゆくせむたつたこ
とまじりあ草花とくんとまじり
なる乃一期二すのゆあ電光
物と徳い一の火ゆりり一のるは
せりれいたのこもたのまじりと
唯善提心のんとわくほせを
祇つらん事ちをなるとまじり
よけりてまじりあまじり
ゆせまじり字をまじり
くじのまじりあまじり

りしたのこゝに糸花も菩提及
たよりいよなきまゝの心と
あつせんを儀よまじりて青
わいもの鬼とさるがなりもの
をうらむくあつてもすまじぬ
日青目の付らぬ諸人も神あるは
なまに二つに百人の神あるとも
まよひも氣ともなきんたあり
一庭のうらよめいづくまのて鬼
とりらゆるごんは能組の秘事
おげありしるきあまのうら
後のせの神と法せよとほく

ア〜はこころ小むれてまじ
る罪よあみとらる神と見
て後を淨おりの別し我々の
發心をお〜の佛法も徳よ
ありつ法の場小まじりも家
がらこころよまじりて〜の法立
るを淨としりも世故あり

一 丑 若小義理淨さ〜むるあせある
と仁義礼智信入りあ常法
たむひとそて義理とむとする
事印忘し右一若よらと神徳と
〜の二若小備神と〜の三若

かほくとして、其の著小免浦三吉
めいと其の根柢のつらばりも義理
わらば、其の常小を(用)なぶるの
かたのよしとくならしむことこれ
つらばりも義理とわらば、其の
あつるに、つらばりて、わらば、義理と
定むる也

一 著小一 根柢とわらば、其の
あつるに、つらばりて、わらば、義理と
定むる也

みよし、その著小一、根柢とわらば、
あつるに、つらばりて、わらば、義理と
定むる也

おのゝ心から然とせぬがごとし

一 夜更の糸は是又あつはは是申
樂乃奥々秘事しひらけと是又
まじふありては海くをい初るる
多子相もわたり 邪遠よるして
しる後がれいさ(と)とれははする
い(ま)の口(ま)しーがくはかり
それよかもいさはましーとがと
よははあなうしは

一 樂拍子た舞の楽拍子王行之間は葉
る者の舞拍子ひしはは拍楽拍子
と説きしをし 時の事しち辰舞と云

一 男氣の世親善善持入はらした
まふ俱舎論の俱舎の舞の事
一 變の上界は月宮月乃まふい
なるふ、寛裳衣非衣の曲はを
唐土より、玄宗皇帝毎夜月
宮小舞つてきたりて楊貴妃にお
し 狂ひ かな利

一 兎さの氣は流破行除破去已し
伯太王舞入る也
一 秘傳花鳥の天照古神の天は意戸
のうら小氣は古志はの川河は上
八百宿神小舞は曲舞不利

催馬樂やがけんんともありし

一 式三書のもち事と信よ徳は秘曲し

一 玉羽のふまハ天照と非也

一 千歳歴ハ春日ハ明神し

一 三書申雅久ハまみよハる節

右此三書法花印乃序ハ正宗ハ

流通ハのニ段也

一 皮シクハ叱囉哩ハハハハハ

叱囉哩囉雅雅喇囉ハハハハハ

一 底哩耶叱囉哩叱囉哩囉

叱囉哩囉雅雅哩囉ハハハハハ

不千代ハハハハハ我等ハ秋作

露と露ハハハハハ幸祐ハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハ

征有耶頓ハハハハハ盧婆ハハハハハ

座ハハハハハハハハハハハハハハハ

千響破非ハハハハハハハハハハハ

驚彼ハハハハハハハハハハハハハハ

驚彼ハハハハハハハハハハハハハハ

允諸千手ハハハハハハハハハハハ

又ハハハハハハハハハハハハハハハ

諸ハハハハハハハハハハハハハハハ

漸乃水冷ハハハハハハハハハハハ

天下泰平國ハハハハハハハハハハハ

ありとつゝや邪何下の義た
阿まハ何下の義たれや何義たれや
千秋万歳の祝の義たれ一まのま
万歳樂こここ所見耶

御歌ハ何まハ小官者有る釋迦牟尼佛
此小官者有る父とハ澤敏大王と白母ハ
足摩耶婦人若多子長者ハ娘也
中不ハ切利天一不ハ花園中庭はま
父の慰親子とまも所祈禱やさん
又りや末後官者一云風と収て氏
不湖乃樂謔玉神恙石出たして
麟角之傾天地開闢して三白也

上帝乃後者偽事ふ義たれよ
祝松とハ松がううううま(河理
字教ここことまかま(万事ハ)
一因常立る小日枝唱之極長人ふ初
管原母小日原秋自其嵐も冬
之る人もなりと所 四座せよ
天来下之雜之乃能とまら
慰是也曲樂といふるをば天
乃書せよ能と深山の松とて
是と負似(ま)いす(三座乃
申樂がらと曰るとも云二座又榮
曲一庭又階一座以之三座がら

一大和四座の申樂と云ふなり
を以て申樂といはれと云ふ字と書きたり
日名の上へ後なる由小はと云ふこと

大和申樂の次第なり

- 一才二 天照右御孫 蘇我 志麻呂
- 一才一 膳太善薩 千歳 治守
- 一才三 春日大明神 三善神樂を奉
さすはまは日名より三千人の宮人乃
社家ののがらたると歌のまはり
守る神也此釋迦如来に春日は
七百三千人の衆人歌りこれ
りて日名國は兼重とて思

次申樂は春日の御神のほもとたり長將
沖子の氣たり三善のよき定めたる
の利三善申樂と云ふと申樂の
しりまはま泰川務安氏の代
申樂と云ふは春日の御神の
かうと春日の御神は一人の
御りなりと云ふは善薩三善天照
右御孫の御神也若宮の
守る神の御神なり守久神三人
乃父母の御神也若宮と云ふ
御神なりと云ふは天照右御孫
大善薩春日の御神の御神なり

父母れはるまきんの面とつりあはれて
天長比久の祈禱たりきまの言の
後るあつまつちあがらとありふ
ありふ其御尋とつりあはせて
わきのあま言はる御尋の流りとの
ならと天竺よもまのみにことより
ありこれれも其侍の守久の神天照
太神宮の流りたりをなす御
の流り何にしてまの御尋の
かめよりしゆよの御とまの
はるまの御の御尋の御尋の御尋
おがとつりしつりあはせて

つりあは

一さうし松の御の御尋の御尋の御尋
が利御をいひしつりあはせて
とらつ字がらと御の御尋の御尋
後打も九曜の御尋の御尋の御尋
あまよひておはる御尋の御尋の御尋
とも御の御尋の御尋の御尋の御尋
か御の御尋の御尋の御尋の御尋
申とらこおまらつとらつとらつ
おとほひおまらつとらつとらつ
日とつらつとらつとらつとらつ
おとほひとらつとらつとらつ

天より波松をうらむる時さうい
こころいり二人をうらむるを
みよとてふよりくさしゆまのり
のりしり松の存はあつしゆ
小星下の山もりつとされ松の
下もてすたきしはる人の事長
比久河新海とい松よりつた
節もかくのいとのまわす毒く
つきこころ口約あ松をよなまを
こころをいしりつとよりつた
なり二月二十七日なりと因はかよ
馬場より四座のころあつた

弓矢の程なるは毎はきやう松の
立合しゆは松小節と拍子の位は
此位としゆは拍子の位は小節と
かこよす事しゆは松の心とゆま
されは被松を天よりと天照を松宮
をよとのいとしりつとはつた
かこよゆは又は被松を長と被松
乃は名とかこよまつとみよま
もはつた本もかくはつた
時かの松いすましり其後松宮は
二年二月六日よはつた
春日右衛門みよまつと

の寺がぬいとりて二月あるを
可とうくいばぬい又依りなき
れはまらつる則二月あるは燈の
およとの氣積海の中をてはとあ
やくは定のうかると回七日あると
立合何と定と氣積と定先
徳とす氣積も子知あま五日といひ
石と掣すはなとやくこの大明神
三千七百人の神の歌からと定おと
しよのとりり右よとまよとく
是ハ春日大明神乃四守の神に
今其あといふるよわたりてく

のくく二からと因四守の神守之
とくは二のまはしよはすの河
たて二書おまぬの氣とらよ
てく二書は二つはつと三十おん
社家れかからたつと二書は二月
又ま日の二書よと氣あつて
はまて二書あつてのま
まらひらつて今段段は
是よりつてまらつてはなつて又
すくはつてまらつてはなつて
とて二書はつてくまらつて
の別なかくは後派の地のつと

三度うしゝのち申すは三書よ
不とこふゆくとくまあゆの舞の
後よれをいれんしとらうと云
申樂さるとせいのちのちか
くくと云ふやういふまゝに三の
兄弟は流すあふふとて今よ
和國よあつてしし舞申樂と
ゆりもあつていふとくは核
ふとこふとやういふまゝに三の
の志一あつていひえのい
ふ村は樂さるあふとくのと
くも書ふとらふとていふと

乃邪事とほらこふまらかんの
しとこふゆくとくまあゆの
ゆりもあつていふとくは核
ふとこふとやういふまゝに三の
の志一あつていひえのい
ふ村は樂さるあふとくのと
くも書ふとらふとていふと

- 才一 千歳
- 才二 舞
- 才三 三番
- 才四 笛

一 丈式三書座方の吹方の事

才五

小鼓

才六

大鼓

才七

太鼓

才八

篠簜

才九

和云

一まくとあを千歳二るえろいほ
 こまけらまおつー長次小右乃
 下しくまもおつーお舟せん
 ぶの座付のるまてりーらる
 まさよ利しーーさいよひと
 あーひよ者ほくさーさせん
 ぶらぶらのまんらるまて面おと

目八ふあやまーくくりりてのこま
 あまかせんぶのたのこま礼と
 ーて舟守長將神座何り
 ひーとせんのととまさく千歳
 面おとあまのまよりりて
 おまのまは面おとてのあを
 とまおまの面とまあ
 箱のあいにまのまのまひを
 ておくら何らこまの舟よ
 あまのまのまのまのまのま
 るまのまのまのまのまのま
 舟よしんてりーのまのま

煙草の盆(西)面(一)札あるはぬわめく
 うま煙草とてよろこぶておとれ
 身とすくもはしりうらほむおの
 ひらたかまひはんこにまよ
 のこむよふとてたのこ
 まらむとていふとておの
 るたよひんがむとておの
 たよららるるのせむおの
 かとまららるるらんらん
 おはら煙草とておの
 時よりあらうららららら
 ひらたかまひはんこにまよ

後をのこしおまらのたぬ
 まらるるおのこ
 中もと後をれとておの
 あらうららららららら
 おはら煙草とておの
 るたよひんがむとておの
 あらうららららららら
 まらるるおのこ
 うらららららららららら
 とておのこ
 危のあらうらららららら
 ららららららららららら

福よほくまをこひしやういさあふ
 の目とを洋のたまふの物あふまよ
 さあむ君のりりいを待たへこ
 とあふりおののせうらにまよ
 うんせまへまねいふうらんあ
 しんじがららふいさあふこくと
 りあふりい一物よこつわり舞
 なあはひののいさあふはこ
 ちのまへよんはさうらのこ
 ひあふりい一物あふいさあ
 ちのまへいり一物あふあふ
 りのせうらあふ

一たんさき一はひこりみあふらあ
 ちあふらあふいりいこ
 橋のらとあふんえの信うい
 いさあふいさあふん
 のまへすいさあふらあ
 あいせんえふらあふらあ
 さいあふいさあふんはあ
 んのまへいりいさあふらあ
 もあふらあふいさあふらあ
 ちあふらあふいさあふらあ
 のまへいりいさあふらあ
 いさあふらあふいさあふらあ

あはれなるものを知りてはなり
まゝのまゝしほをなせりてかく
るべしなり

一
たまたまふぶのふぶはすれはすれはす
三つにふぶと物口の真二口の草三頁
は日は日ひひもくはは但あきあ
是ら物口のふぶはすれはすれは
あはれなるものを知りてはなり
まゝのまゝしほをなせりてかく
るべしなり

まゝのまゝしほをなせりてかく
るべしなり
あはれなるものを知りてはなり
まゝのまゝしほをなせりてかく
るべしなり
あはれなるものを知りてはなり
まゝのまゝしほをなせりてかく
るべしなり
あはれなるものを知りてはなり
まゝのまゝしほをなせりてかく
るべしなり

あふのしら二河はいらのしらをま
いせくもてあつて志のゆる
しそわい(と)まほのあの時
おこあいのしら小鞆ちりく
しら山も足新袴のころを
二日の新袴はけまきあゆ
えよあの時新袴のころを
あをくのしらあゆの袖をか
しらあゆのしらあゆの袖をか
しらあゆのしらあゆの袖をか
しらあゆのしらあゆの袖をか
しらあゆのしらあゆの袖をか

新のあゆのしらあゆの袖をか
新のあゆのしらあゆの袖をか
小鞆三つらの口得ま(ま)きき
まそ新のしらあゆの袖をか
しらあゆのしらあゆの袖をか
ならあゆのしらあゆの袖をか
花やうま(と)あゆのしらあゆ
後どのあゆのしらあゆの袖をか
あゆのしらあゆの袖をか

一 式三春のすの 日幼遊のすの
初日ハと(と)が(と)が(と)が
二日ハ(と)り(と)り(と)り



三日ハのりら



に日ハのりらとて感そなるハ
のありとほほこのまじふら
れうらかののこふらうら
をまのありまじとてあせく
うらうら舞の舞すまじこ
かくやうらとてあせく
うらうら入舞はまじとて
は後ハのりらハの時小
うらあせくとてあせく
りらあせくとてあせく
すあせく

一 翁助てのりらとて感そなるハ
のりらあせくとてあせく
りらあせくとてあせく
うらあせくとてあせく
二 乃のりらあせくとてあせく
のりらあせくとてあせく
右形かくのりらとてあせく
らあせくとてあせく

以上三十七ヶ条
阿のりらあせくとてあせく
まじとてあせくとてあせく
翁助てのりらとてあせく

げ巻よの御道とらありて
しよにあらまきしーあやし時
らまきしーとえにありあ
るる鏡もあしき御道よに
さしすあにんていとしあひる
かりあまのたははな花鏡
たさありしとりてはく
御道とまきしーなるこ

一ちまのしそまよしあひし
柳花鏡書しきりくさよあ
けしそ田分よありしあひあふ
まの申しー花よまきしー花

折しあしんるなるあひあし又
あしの折しるまあそひ曲よは花よ
うしあまのあひあしとあしあ
ひちまよしあしあふ花と鏡さし
とて花鏡よこれとまきしあ乃
極まけけよふあふまのあし
よしー秘書すしーのうれあ
さしすれのあひあまきかりて花
鏡書はあしきよなるあしよふ
しろまのまきしー家と鏡子
よろあ人よんてあしきあしれ
ちまの秘さすふあしあふや



